轟木小児童と白石老クが合同劇

演劇通じ地域の歴史を学ぶ

轟木小学校（平野守雄校長・児童56人）では、10月21日に開催された学習発表会「とどろき祭り」で高学年児童が白石老人クラブ（中村丈夫会長・会員17人）と合同で演劇を行いました。轟木地区に学校を建設するため、地域の人たちが積み重ねてきた苦労と情熱。子供たちは劇を通じてその歴史を学びました。

轟木小学校では、5・6年生児童が白石老人クラブと合同で演劇を行いました。これは、毎年同校で行われている学習発表会「とどろき祭り」の中で披露されたもので、同校では初の試みとなります。

薄れゆく建設当時の思い

轟木小学校は昭和58年に織笠小学校轟木分校から独立してできた、町内では比較的新しい学校です。しかし、昭和28年に轟木小の前身である轟木分校ができるまでの道のりは決して平坦なものではなく、地区の皆さんは学校の建設に、さまざまな苦労を重ねてきました。

しかし、轟木分校建設からは半世紀が経過。保護者の世代も変わり、当時の苦労や地域の情熱を知る人は数少なくなってしまいました。学校の歴史を知る人や、当時創立にかかわった人たちからは「自分たちの志を受け継いでほしい」という願いとともに、学校が主体となった地域づくりをしてほしいという声が寄せられていました。

「学校の歴史」を題材に

そこで平野校長は、本年度のまなびフェスト（学校が作る学習目標）に白石老人クラブとの合同劇の開催を計画。学校の歴史を題材にし、中村会長や歴代PTA役員の方々から聞いた話を基に「とどろきの99年史」の脚本を書き上げました。

劇の練習は10日間にわたって行われ、そのうち半分は老人クラブとの合同で実施。はじめは自信なさげに演技していた子供たちも、監督の阿部光浩教諭や中村会長から指導を受けながら、日を追うごとに上達していきました。子供たちもセリフを忘れた老人クラブの方に教えてあげるなど、お互いに支え合いながら、けいこに励みました。

①轟木小学校校舎前にある「思いやりの丘」に設置された石。この石の由来を探ることから物語は始まる／②子供たちとの合同練習の様子／③老人クラブの方からスコップの使い方の指導を受ける児童／④監督を務めた阿部教諭も演技指導に思わず熱がこもります

地域の歴史を伝える機会に

白石老人クラブ会長
中村丈夫（たけお）さん
（織笠・72歳）

毎年開催されている「とどろき祭り」で、子供たちだけでなく、大人も一緒に何かできないかと考え、白石分教場ができて100年目、轟木小学校が創立25年目の節目を迎えることからこの劇をやろうと思いました。当時からは世代も変わり、学校建設にどのような苦労があったか知らない方も増えてきています。子供たちに十分な教育を受けさせるため、地域が一丸となって学校造りに汗を流した歴史を、子供たちや地域の皆さんに知ってもらう機会になればと考えています。できれば来年も続けたいですね。

地域と学校が身近な存在に

轟木小学校校長
平野守雄（もりお）さん
（八幡町・52歳）

きっかけは昨年10月ころに、シルバーカレッジの方々が山田南小で演劇を披露したという新聞記事を見たことでした。そこで白石老人クラブの中村会長と話し合い、児童と合同での演劇を行うことを計画しました。いつも見慣れている学校の前庭にある大きな石。この石の由来を調べていくうちに、本校の歴史の裏側には地区の皆さんの大変な努力があったことを知り、題材に取り入れることにしました。この劇を通じて学校の歴史を知っていただき、地域と学校がもっと身近になっていけたらと思います。